

地域と協同の 研究センターNEWS

2025年3月25日発行
247号

第21回東海交流フォーラム報告

協同が生まれるまちづくり 「協同」の一歩をふみだそう

2月22日（土）、コープあいち生協生活文化会館に於いて第21回東海交流フォーラムが約80人の参加で開催されました。その一部をご紹介します。
(文責：事務局)

開会あいさつ 森政広さん（コープあいち理事長・地域と協同の研究センター代表理事）

今日は「協同」の一歩をふみだそうということで、それぞれの組織、お集まりの個人のみなさまがどうしたら協同を実感できる社会になるのか、そして私たちが地域にもっと貢献できるということはどんなことなのか、今日はそんなことを考え合う一日にしたいと思います。

「協同が生まれるまちづくり」実践に学ぶ 報告共有とディスカッション

報告1：「いっぽ・には」から「さんぽ」へ 協同の労働の力

櫻井早苗さん（ワーカーズコープ愛知三河事業所 所長）

1) 愛知三河事業所のあゆみ ～一人目の困ったとの出会い～

今から12年ほど前に一人の障がいがある女性に出会って、なんとかしようという仕事から始まりました。当時、私たちは児童館の運営をしていました。その時、障がいがある28歳の女性が児童館に入ってきて、そこでなんとかしようということになり、組合員みんなで「障がいのある女性の働く場をつくりたい」と話し合いました。そして放課後等デイサービスを立ち上げることになり、地域の人に知っていただけるように2015年3月に「いっぽ餅つき大会！」を開催しました。

2) 愛知三河事業所の活動指針

愛知三河事業所の活動指針を私たちは自分たちでつくりました。

事業所の存在目的

障がいのある児童や保護者にとって、「住みやすい地域づくり」を！“ワクワクドキドキ”を合言葉に、地域の困りごとに寄り添い、地域とともに「困った」を「良かった」に！！

存在目的に込めた思い

放課後等デイサービスとして、まずは十人十色の子どもたちが生きていく上の“困った”に寄り添い、そこから保護者の方や地域の方、そして組合員、それぞれの“困った”をみんなで考え、支え合い“良かった”に！そして、人と人とがつながり、輪が生まれ、みんなが安心して集うことのできる、『“ほっ”とできる あたたかい』居場所、地域づくりをしていこう！

3) 大切にしていること

障がいのある子どもたちですが、実際に自分で見て、考えて、選んで、どうしたいか、自分のしたい思いを表したらと思い取り組んでいます。取り組んでいることは、①実際に見ること、②自分で考えること、③自分で選ぶこと、④決めること、⑤やってみること、です。

4) 愛知三河事業所 「医師中村哲の仕事・働くということ」 映画上映会について

ワーカーズコープが「医師中村哲の仕事・働くということ」という映画をつくってくれ、私たちで地域に広めようと相談し上映会を行いました。そして映画会を行ったことでいい効果が表れました。

【2ページにつづく】

地域と協同の研究センター 3月の活動

1日（土）能登半島避難者学習交流会 生協職員マイスターコース（第16期）第7回・修了式	16日（日）サードセクター研究会
2日（日）生協の（未来の）あり方研究会	20日（木）多文化料理教室（千種区委託企画）
6日（木）第9回協同の未来塾・修了式	23日（日）HOMI わいわい農園（豊田市）見学会（三河地域懇談会）
8日（土）東海交流フォーラム実行委員会、第4回理事会	24日（月）常任理事会
13日（木）三河地域懇談会世話人会	29日（土）難民食料支援学び語り合う会⑫、友愛協同セミナー
目次	1 情報クリップ 8 書籍紹介「働くことの小さな革命」 9
	10 12

【1ページからつづく】

5) 私たちの新しい仕事おこし「生活介護さんぽ」について

人とのつながりがどんどん生まれてきました。以前から「放課後デイサービスいっぽ」「にほ」を利用していいる保護者の方から、「今はまだ自分の子どもが小学生・中学生・高校生だが、その後のことはどう考えているのか?」と言わっていました。映画を上映したことや、サービス管理責任者の資格を持っている人に出会い、なんとかなるということで動き出し、「生活介護さんぽ」として3階建ての建物でやるばかりになりました。しかし、やっと始めようと思った時に落とし穴がありました。用途変更が必要で、書類が揃わず、「生活介護」としては指定申請取り下げとなりました。どうしていこうかと相談し、豊川市の事業で「日中一時支援事業」というのがあり、それならできるのではないかということになりました。放課後等デイサービスを使っていた子ども達の時間が終わってから預かったり、日曜等お休みの日に預かったりする仕事です。「生活介護さんぽ」は10月に開所する予定です。

6) 私たちの目標

子どもにとっても、地域のお年寄りにとっても、組合員にとっても「居心地の良い愛のある居場所」にしようということです。これに向かってやっていきます。

報告2 「おたがいさまの家」を拠点に地域が変わった たからブロック

速水滉さん(南医療生協 理事)の報告

NPOおたがいさまの家二人三脚がオープン

南医療生協で2016年度から常設のサロンを地域で広げたいと始まったのが「おたがいさまの家」です。「おたがいさまの家」は、そこに来ると「誰かに会えて、何か食べられて、誰かにつないでもらえるところ」を目指しています。現在10カ所あり、私たちの地域の二人三脚は8番目に誕生しました。

NPOおたがいさまの家「二人三脚」のある地域は、六つの支部に分かれています。組合員数は3875人です。南医療生協の事業所は、二人三脚の他①たから診療所、②たから居宅介護支援事業所、③たからデイケア、④ヘルパーステーションわたぼうし、があります。そして「二人三脚」がある名古屋市南区の大生学区は高齢化率3割以上で、「おたがいさまの家」が一番必要な地域です。NPOおたがいさまの家「二人三脚」は2022年10月30日にオープンしました。NPOとしていますが法人化しているわけではなく、自分たちで空家を探して運営していますので、自主的な管理を目指すために「NPOおたがいさまの家」と登録しています。オープンのために7~8年前から空家を探していましたが、一軒も貸してもらえるところがありません。ある人から「まだ空家を探しとるん?」と連絡があり、地主さんに南医療生協が高齢者を中心としたサロンをつくりたいと考えていることを伝えました。すると「南医療生協と『志』が一緒ですね!!」ということで地主さんと一緒にやることになりました。それから近隣のお宅を訪問し、賛助金のお願いをし、130人くらいの方に協力いただき、24万円ほど集まりオープンとなりました。現在、コーヒーを飲みながら雑談するとか、モノづくりで人形をつくるとか、毎月健康講座も開催しています。

バスハイクで楽しく

南医療生協の事業所で、たから診療所の近くにヘルパーステーション「わたぼうし」があります。そこと、「たからブロック」には7~8年前に「おたがいさま運動」の対応をするための「ボランティアの会」をつくりています。共催でバスハイクに行きたいということになり、昨年9月に知多半島一周のバスハイクを計画しました。ヘルパーステーションの利用者さんは車イスの方も3名ほど行かれて、ボランティアグループで練習もして、車イスをバスに載せて行きました。職員も含めて33名が参加し、帰ってきたら「また行きたい」という声があふれています。

吉野光汰さん(地域ささえあいセンター係長)の報告

私も速水さんと一緒に地域活動の支援を行う部署について、支援をしています。どの「おたがいさまの家」も、それぞれの地域のニーズに合わせて活動をしています。地域の方が自分たちで家探しから始めて、運営も自分たちでしています。職員も、近くに「おたがいさまの家」があると紹介したり、デイケアの利用者さんに声掛けたりして、協力しておたがいさまの家を盛り上げようとしています。今後も、地域の住民のみなさんが必要な場所を、地域の網の目をさらに細かくしてやっていきたいと思います。

報告3: 「始まった協同の縁(えにし)交流会」新城～飛騨高山～滋賀へ

松原滋さん(コープぎふ 飛騨支所)

ちょうど7年前に飛騨市でAコープのお店が閉店し、相談があって飛騨市とコープぎふとの連携事業で地域複合サロンに取り組みました。そして2022年には、「やなマルシェ」の研修にバスで行きました。地域の方、JAの方にも呼び掛け、「やなマルシェ」を見学し、帰ってきて、飛騨市と飛騨市の河合地域、JA愛知東との交流ができるようになりました。こうしたバス研修に、SUN・SUN会のメンバーが参加し、今回の報告につながっています。

加藤久美子さん (JA愛知東 女性部やな)

地域活動をされていて、まわりから「居場所ができて、地域が明るくなって、みんなのおかげ」「ほんとうにありがとうございます」と言われませんか?その後に「こんな割の合わないこと、よくやるよね、好きだよね!」って言われませんか?傍からみて楽しそうに見え、それってやろうとしたことそのままだと思います。「やっていてよかった」「おたがいさまで地域を支え合っている」、これって私たちが思っていた姿だと思います。これが協同で、そして組織立てたのが協同組合ではないかと思います。

廣田令寿さん (JAひだ 朝日支所長)

たまたまJAの空き店舗が、旧Aコープ朝日店 (JAひだ)、旧Aコープ八名店 (JA愛知東)、日野東支店 (JAグリーン近江) とあり、これを利活用できないかということでお話ししています。

地域を持続可能にするために、地域力ということを考えました。地域力は人口が減り、どんどん下がっています。企業は撤退し、私たちの生活が困難になります。その地域力を上げていく、又は現状維持するためはどうしたらいいかお話し合っています。その原因として、コミュニケーションの不足、事業や文化の継承困難、地域コミュニティの崩壊ということがあると思います。その地域力を上げていくためには、気づきや、つなぐ活動、地域を大事に思う人を育てることが大事ではないかとお話し合いました。

そこで協同ということをお話し合い、協の字を私たちは3つの力、十文字につながる力と読み替えるようにしました。共生、共助、共働という事の中で、しっかりと地域循環型の環境づくり、お互いさまの人づくり、活動の仕組みづくりということを目的に活動していくことをお話し合いました。そして、組合員、地域住民の方が真ん中に来て、まわりの企業、行政が支えていく、そういうことをもっと大事にしようと考え、Aコープ店跡地をどう活用しようかと、SUN・SUN会を設立しました。

SUN・SUN会は2024年7月19日に設立しました。その前に、4月17日から「あったかルーム (ミニディ)」の活動はスタートし、8月の夏休みに、子どもを対象に甲谷魚釣り教室 (8月5日・31人参加)、こども未来輝くあさひ・たかねeスポーツ大会 (8月6日・40人参加) を開催しました。次に地域の方々が先生となって創作教室を実施し (パン・モビール・宝箱ワークショップ 8月7日)、防災体験 (8月9日) を企画し、SUN・SUNまつり (8月10日) を開催しました。この6日間で延べ600人の方に参加いただきました。こうしたいろいろな事例を、行政、生協、各団体、JAのみなさんが集まって交流する「協同の縁」交流会をしようということになりました。それが元気の基として今につながっています。

福田真由美さん (JAグリーン近江 総務課 課長)

滋賀県にある桜谷地域農村RMO推進協議会を代表しまして事例報告をさせていただきます。桜谷地域農村RMO推進協議会のRMOというのは国の補助事業です。JAの店舗が閉店になり、地域住民の方が何かできないかと考えて、国の補助事業を活用してはどうかと手を挙げていただきました。

桜谷 (さくらだに) 地区とは

滋賀県の南東部にあり、日野町全体でも高齢化率31%で高い地域ですが、桜谷地区は特に高齢化率が高い地域で45%くらいです。農というのは農業をしている人だけでは守れない、地域全体で農業を守らないと農地は守っていけないという所が原点となり、地域のみんなで農業を守っていくにはどうしたらいいかということを考えています。そこに、滋賀県は伴走支援として関わっていただき、日野町は行政とのやりとりの調整でご協力いただき、JAグリーン近江は理事としてRMOに入らせていただいて空き店舗を活用していただいている。

将来のビジョン

桜谷地域は、人口減少とか少子高齢化といった同じような悩みがありますので、農協の空き店舗を活用して「共に育む、笑顔あふれる桜谷の未来」を目指して、地域のみんなで活動していくことを、目標を掲げて活動しています。

活動の詳細

地域計画を策定するにあたりRMOは各集落とか農業委員のみなさんと一緒にどうしていくか、検討しました。耕作放棄地はすごく増えている、遊休農地も高齢化で誰もつくれなくなっています。そのような状況の中、土地活用でいい方法はないかとクルミを植える相談をしています。まだ計画段階でクルミの苗が手に入るるのはこの秋です。また機械に頼ろうと、スマート農業技術の勉強会をしてみたり、ラジコンでの草刈りをしてみたり、省力化ということで機械に頼る取り組みをしています。また地区には竹林が多く、世話もたいへんなので、メンマにしてみようと、メンマづくりの試作もしています。地域は山間地で、野菜ものはつくれませんが、米はなんとかつくれますので、「米づくり」収穫のオーナー制度を始めました。SNSで募集をかけたところ、すごい反響で38組の家族が参加予定です。

5月2日に滋賀県蒲生郡日野町で第2回の「協同の縁」交流会をさせていただくことになりました。協同の鐘を3団体でつくっていただきまして、この日にお披露目もあります。全国にこうした活動を広げていきたいと思います。

特別報告「協同組合のアイデンティティ」の世界的協議を活かしていくこと

前田健喜さん (JCA：日本協同組合連携機構)

国際協同組合同盟 (ICA。世界の約100か国から約300組織が参加。日本からも17団体が参加) は、2021年12月のソウル大会を起点に、「協同組合のアイデンティティ」(定義・価値・原則) に関する世界的協議を開始しました。今の「協同組合のアイデンティティ」は1995年に決められていて、それから30年の環境変化を踏まえて見直しが必要か検証しようということです。世界の協同組合に意見が求められ、日本からも三団体(地域と協同の研究センター、日本生協連、JCA)が意見を提出しました。JCAでは、各地のワークショップ等で出されたコメントを基に提言をまとめました。ICAでは世界からの意見を踏まえて検討し、2024年11月29日にインドで開催された総会で二つの決議を提案し、両決議は承認されました。

一つ目の決議(決議Aとします)は、アイデンティティを「明確にする」「実践に生かす」「伝える」「守る(制度等を整える)」の各分野について、ICAや会員組織が取り組むべきことを示したものです。

もう一つの決議(決議Bとします)はアイデンティティに関する世界的協議を継続する趣旨の決議です。決議Bについて総会では、併せて示された改定案(これは決議Bの一部ではなく関連文書の扱い)に対する意見、アイデンティティが法律や国際的な文書に入っているので簡単に変えるべきではないといった意見などが提出されました。投票の結果承認されました。今後、協議のプロセス、改定案がICAから示され、世界中で協議が行われ、意見が出され、大会を開催して最終的な議論を行い合意に達し、その後の総会で改定の是非・内容が決定されるという流れになります。

JCAとしては、まず一つ目の決議Aについて、「アイデンティティ」に関してICAや世界の協同組合が取り組むべきことを打ち出したことを評価し、特に教育とか広報の取り組みについて、これまでやってきたことをさらにしっかりとやっていきたいと考えています。

二つ目の決議Bについては、この30年の環境変化を踏まえアイデンティティ協議の継続をICAが決定したことは大事なことだと思います。関連して示された改定案も、地域社会への関与の強化、組合員参加の記述の強化、職員への言及、環境や平和への言及、広報の強化など、日本から提案された中身もかなり反映されており、世界の協同組合の意見を受け止めようとしたものとして評価できると思っています。

例えば第7原則は「地域社会(コミュニティ)への関与」の原則ですが、地域への関わりをより強化すべき、という趣旨の地域と協同の研究センターJCAからの意見は、かなり反映されたと思います。改定案では表題が「地域社会(コミュニティ)への積極的関与」となりました。「積極的関与」の元の英語は、「約束」の意味もある「エンゲージメント」で、現在の「関与」(元の英語は、関心、気遣い、配慮といった意味の「コンサーン」)よりも強くなっています。ちなみに、総会で示された改正案の注には、「この原則について、協同組合の独自性を失うかもしれない心配する人たちもある」という趣旨のことが書かれていました。「協同組合は組合員のニーズと願いをかなえるのが目的であり、その先のもっと公益的なことに関わるとすると、それは逆に協同組合らしさを薄めてしまうのではないか」という懸念だと思います。このあたりは、地域への関わりの強化の必要性を感じている日本の協同組合関係者の感覚とは違うのかもしれません。

今後継続していくこの世界的協議に対して、日本からは(日本の提案が入ったかどうかということよりも)「日本を含め世界の協同組合がさらに力を発揮できるようにしていくにはどうしたらよいか」という観点から議論に参加していくことが大事だと思います。また、この世界的協議を国内で生かしていくことが大切だと思います。今回の協議が、アイデンティティを改めて確認するよい機会になったという声はすごくたくさんいただいている。今後、日本の協同組合の具体的実践に関わる論点について考えるセミナーの開催など、地域と協同の研究センターをはじめ国内の協同組合研究組織とも連携しながら、この協議を日本の協同組合の現場の実践に生かせるように、取り組んでいきたいと思っています。

各分散会の報告 4つの分散会に分かれ、テーマに沿って交流しました。

第一分散会報告 「多文化・多様な共生社会の広がりに学ぶ」 三重地域懇談会

三重懇談会分散会では、昨年に引き続き「みんなにこ」の西村さんからの報告がありました。新たに、鈴鹿高専の学生2名からは「バトンプロジェクト」の活動報告があり、参加者との活発な意見交換が行われました。

「みんなにこ」の西村さんは、外国人集住地域である四日市市笛川地区で子ども食堂を運営しています。みんなにこの子ども食堂では、80人が「いただきます」と言って食事を共にすることを目標にしており、持ち物持参によるゴミ削減や、防災対策として上履き持参を推奨し、地域のゴミ拾い活動にも取り組んでいます。ゴミ拾いの参加者にはお菓子を配布して、積極的に活動に参加できるような工夫をしています。そして「食べ残しをしない」「無理をしない」「みんなニコニコ」の3つを活動の基本方針として、多世代交流の促進に力を入れています。また、子どもたちにSDGs(持続可能な開発目標)のテーマソングを用いてSDGsの概念を紹介しています。異なる文化背景を持つ子どもたちには、自己紹介のプレゼンテーションをする機会を作り、発表者にはお菓子をプレゼントして、多文化共生を進めています。西村さんは、マジョリティーとマイノリティーの関係についても触れ、対等・公平を意識した活動の大切さについてお話しされました。さらに、2024年には支援

の拡大が進み、多くの協力を得ることができた一方で、高校生の参加が減少したという課題があります。2025年には新たな拠点を設け、フードパントリー子ども食堂を充実させ、高専生や大学生の関わりを増やしていくことを目標に活動をされています。

次に、鈴鹿高専のお二人から報告された「バトンプロジェクト」は、食品ロス削減を目的とする学生団体で、食品ロスの現状を目の当たりにした学生たちが立ち上げました。個人や企業から寄付された食品をフードバンクや子ども食堂に届け、受け取り手と提供者を直接つなげるためのデータベースやSNS運営も行っています。設立から8ヶ月で、防災食や農家の廃棄野菜、加工業の余剰食材など、300kg以上の食品を、必要とする団体に寄付をしました。今後は、地域全体で食品ロス削減の仕組みを広げ、持続可能な社会に貢献することを目指しています。2つの団体の報告の後、参加者から多くの質問が寄せられました。「みんなにこ」の西村さんには、子ども食堂の設立経緯やゴミ拾いの取り組みについて質問がありました。コロナ禍で活動が制限されていた中、フードパントリーとの出会いやゴミ問題に取り組むに至った経緯が説明されました。「バトンプロジェクト」には、人手の確保や食品の配布方法についての質問があり、現在は3名の正式メンバーで活動していること、また食品は主にフードバンクを通じて配布していることが説明されました。さらに、活動の持続可能性についても質問があり、次世代に引き継ぐために高校生との連携やクラブ設立を検討しているとのことでした。大学との連携についての提案も出され、活発な意見交換が行われました。

第二分散会報告 「買い物から生まれた『班』とつながり その過去 現在 未来」尾張地域懇談会

司会の近藤充代さんから分散会の趣旨説明があり、話題提供として最初に愛知ワーカーズ・コレクティブ連合会の藤井恵里さんから「生協の組合員活動から始まった協同労働」と題する報告がありました。生活クラブ生協と出会い、「班」の活動を通していろいろな学びと発見があり、共同購入を通して仲間の結束も育っていったこと。生協の個別配送を担うワーカーズ・コレクティブの創出を計画し、2004年6月に8人で設立。これにより、戸別配送導入で共有できる場が減ったが、個人化しないで事務局の性格を持ちながらも組合員感覚を運動と事業に反映できる存在を大切にし、人と人を繋げる役割を持って材を届ける事を重視することで、結果的に生活クラブの意思決定や運営への参加が高まったことが報告されました。「班」が減少し繋がりが弱まった様に見えるが、暮らしやすい社会にしたいという自立した市民がいることを労働者協同組合は教えてくれると報告しました。

続いて、コミュニティ通訳の労働者協同組合のとりくみを、大島 ヴィルジニア ユミさんから動画による報告がありました。「ブラジリアンコミュニティ通訳者サポートの会」という名前で2015年に設立し、主に行政や病院、学校等の通訳を担当。きっかけは1990年前後、日系ブラジル人が家族と共に出稼ぎ労働者として来日した時に、子どもの教育や通院あるいは行政対応などは日本語が分からないので行政側も困っていた。そこで日本語の分かる人に通訳を依頼されたこと。現実は第2言語の社会で活躍するしかなくコミュニティ通訳の勉強会は日本語になるため第1言語で詳しい説明があった方がいいと思い、講座を開いたら全国から多くの人が集まってきた。中でも意識の高い人たちが学習や通訳の事業を始めたいと考えるようになり、労働者協同組合がふさわしいという事で、法人化に向けて準備を進めているとの報告がありました。

つづいて大橋充人さんより大島さんの補足として、背景の説明があり、愛知県はブラジル人が多く在留資格からも自由に活動できる方が多いこと。愛知県のプランや国の支援なども紹介しました。

次に大島さんから誘われた翻訳や通訳の仕事をしているフルヤ・ルシアさんから、自身の経験を通して法人化に賛同し、進めていることの報告がありました。

最後に生活クラブ生協・愛知の山田晃久さんから「つながるローカルSDG's」の動画の後、生活クラブは「まちづくり運動」であり「ワーカーズ・コレクティブ運動」であること。生活クラブがプラットホームとなり、いろいろな繋がるきっかけを作って事業を実施していること。愛知県の事例として、岡崎市と尾張旭市を紹介し、人と人がたすけあい、ささえあって暮らせる地域づくりは、自分から一步踏み出してみることから見えてくると思うと結びました。

その後、参加者での意見交換があり、事前に文書を用意された方の意見を紹介し、「班」活動の場づくりから労働者協同組合への発展、その目指すものや役割などについて議論を深めました。

第三分散会 「居場所の大切さを学び、考え、語り合う」 三河地域懇談会

三河地域懇談会では、「地域で粹な老い支度を」をテーマに活動を続けています。今年度は、安城市のNPO「ing」の見学を行い、居場所の重要性に着目しています。今回「居場所の大切さを学び、考え、語り合う」をテーマに分散会を開催しました。発足当初からフォーラムで紹介してきた新城市的「やなマルシェ」とは常に交流し、応援しています。代表の加藤久美子さんがこのフォーラムに初めてリアル参加をされ、地域の交通について考える会、防災を考える会、農業（鳥獣害や耕作放棄地など）について考える会など個々に様々な活動をしてきたけれども、地域全体の街づくりを考えることが必要で、5年、10年先を考えるようになってきたという報告がありました。

世話人会からは、平和の学習会や、「農・食・健康」をテーマにした「えざね協同ファーム」への参加、「コープ安城よこやまへ寄らまいかん」の報告がありました。

メインはNPO「ing」の松岡万里子さんのお話です。以下、概要を紹介します。

□松岡さんの背景と経験□

松岡さんは子育て中の母親たちが学べる場を作る活動に力を注いでおり、地域の課題解決に取り組んでいます。彼女の活動は、個人的な経験から生まれました。特に、4人目の子どもを体内で失った経験が、地域活動を始めるきっかけとなりました。この悲しい出来事を通じて、他の母親たちが安心して話せる場を提供したいという思いが強まりました。

□活動の出発点□

活動を始める前、生協（コープあいの前の前身のみかわ市民生協）との出会いがあり、共同購入を利用していました。そのころコープ安城よこやまの開店に向けて、商品の学習・開発や他の店舗見学等にも参加しました。

当時、子どもを連れて学ぶ環境がほとんどなかった中、生協ではそういう機会がたくさんありました。4人目の子どもを亡くし、自分を責める時間が続く中、友人にすすめられた託児者集会に出かけ、じつとしてちゃダメだなという気分になりました。そして託児付きの学習機会を設けることが活動の主軸になりました。子育て中の母親たちが自由に学べる環境を整備するために、社会福祉協議会や公民館と連携し、母親が子どもと一緒に学習や対話できる場の創設に尽力しました。

□学びと対話の重要性□

対話と傾聴が自分の中では活動の中心になっています。年間30～100の託児付き講座や語り場、ボランティア養成講座などを行ってきました。専門家を招いた講座の後、参加者同士が話し合う場を繰り返し設けることで、地域での絆を深めました。1回ではなく、2回、3回と回を重ねました。

□さまざまなテーマ□

親の介護・環境問題・子どもの教育やいじめ、不登校の課題・緩和ケア病棟でのボランティア・エンディングノート・高齢者のお出かけ見守り隊など、さまざまなテーマに取り組んでいますが、それらはみな、地域で直面する課題の解決につながるものです。

お話を聞き、参加者から具体的な質問もたくさん寄せられ、見学に行きたいとの声も出されました。意義ある交流となりました。

第四分散会 「人と地域がつながる協同・ささえあい～誰もがキーパーソン！？」 岐阜地域懇談会

『岐阜世話人会は人にフォーカスして活動してきました。その人がなぜそういう思いで、取り組んでいるのか、なぜそういう思いになったのか、それをサポートしている人はその人のどこに共感したのか、地域には必ずキーパーソンがいて、そこで地域に変化が起きています。それを自らの生き方に生かそうという思いで地域懇談会をやってきたつもりです』・・地域懇談会世話人、河原さんの言葉です。第4分散会は、「人と地域がつながる協同・ささえあい～誰もがキーパーソン！？」がテーマでした。

最初に、昨年10月19日に開催された、プチフォーラムイン岐阜の動画を見ました。各務原市八木山地区社会福祉協議会の、ささえあい活動の取り組みの様子を当事者の方たちがいきいきと報告された動画です。ささえあい活動のキーパーソン、清水孝子さんから、10月のプチフォーラム以降の、活動の様子を伺いました。「トイレが詰まった、助けて！」という2件の依頼に応じて、2人の男性によって解決したこと。ちゃんと手を突っ込んで直してくれるそういう仲間がいること、それを見て地域の人は「こんなことも直してもらえる」と安心できること。また、プチフォーラムで八木山地区の様子を知った方から、「こんなにいいところに、母を住ませたい」というお話があり、いろいろな準備が進められているという報告がありました。「私がキーパーソンとすれば キーパーソンのおかげでいっぱい喜びに出会える」という言葉が印象的でした。

福井さんからは、生協の班からうまれたサロン活動の様子が報告されました。コープぎふの前身、岐阜地区市民生協がまだできたばかりのころ、組合員も生協商品を利用するため、クリアする条件がいろいろあって、班の人への思いやりが必要だったこと、そのために様々な場面で話し合いがあって班の結びつきが強くなったり、たのしい班のおしゃべりが、月一回のサロンの開催につながり、17年間続いていること。岐阜地域懇談会で訪問し出会った人々や、研究センターのフォーラムや会議から学んだことが、サロンの運営にも活かされ、福井さん主催のサロンは他とはちょっと違う・・と、そこに注目された社協からも見学に来られるようになりました。5年前から社協の事業計画の「地域の居場所づくり、子どもから高齢者まで参加」の企画と運営に参加するようになり、現在はボランティアグループもでき、70人規模のサロンの運営も担っています。

井貝さんからは、ささえあいの家にあこがれて、集まる場所づくりとして地域で毎週開催のサロン「いなほ」を始め、みんなのやりたいことを協力してやっていたら、協同が「いなほ」に生きていたことに気づけたこと、楽しい活動をしていると自然に人が集ってきて、新しい関係が生まれたことが報告されました。

アンケートから・・・

- ・それにしてもみんな楽しそうで、それが2歩や3歩に繋がるのだろうと思いました。

・地域のために取り組んでいるというより、自分の生き甲斐のためにとりくんでいることそれでいいんだといふことがわかり肩の力が抜けた気がしました。

まとめの全体会 最初に各分散会からの報告があり、小木曾洋司さんの報告がありました。

「現代社会における協同の意味を考える」

小木曾洋司さん（中京大学現代社会学部 教授・研究センター理事）

協同ということをどう捉えたらいいのかをお話します。協同は「いっしょにくらしていくための方法」というように考えます。ここには三つのことがあります。一つ目は「いっしょに」ということです。二つ目は「くらしていく」ということです。そして三つ目は「方法」です。

1) いっしょに

「いっしょに」といった場合、つながっているということですが、大事なのは誰と誰がつながるのかです。その範囲が広くなればなるほど、活動（関係）が共益から公益の方に近づいていきます。

この「いっしょに」ということを一番よく表現しているのは各務原市の八木山ではないかと思います。三重地域懇談会の八木山「ささえあいの家」視察報告で「つながれば安心して、終の棲家として今の家でくらせる」ことがわかったとありました。「ささえあいの家」の清水さんが活動を始める時に、八木山の光景は、高齢化によって、近くで買い物ができない、坂が多い、だから娘や息子のところに引っ越していくという人の姿だったといいます。そこから清水さんの活動が始まり、住民が「いっしょに」支え合うつながりをつくることによって「ささえあいの家」が実力を発揮してきます。

戦後の高度成長以来、個人化、孤立化が進み、現代社会の大きな問題になっています。戦後の住宅開発は、焼き畑農業的開発と言われていて、駅から歩いていける範囲にマンションをつくり、それを越えたところに戸建てをつくり売り出します。そうすると入ってくるのは、35歳前後の人たちと、小学校に上がるか上がらないかの子どもたちです。子どもたちは大きくなると全部出ていき、開発地は高齢化して住民は孤立化していったのです。八木山の協同が示したことは、地域社会の個人の中には余るほどの知恵や能力が埋まっているということです。それをどうやって耕すか、個人の中に「眠っている」ものを出せれば、いろいろなことができます。

地域社会における能力というのは、それを必要とする人に出会って初めて能力とわかるものです。能力は、必要とする人がいて初めて地域資源になるし、本人も能力と自覚します。そして、能力を地域で発揮するということが、その能力を発揮する人自身のくらしの支えにもなるということを、八木山は教えてくれていると思います。

2) むらしていく

「くらしていく」ということは、地域社会の持続性を表しています。地域社会では住民の変化があります。年齢構成や家族構成が変わっていきます。そのたびにニーズが変わります。開発地に最初入ってきた時は、同じ比較的若い年齢層が多く、ニーズは同じです。しかし、高齢化によって消費が減少していくと商業機能は、みんな出ていくわけです。高齢化のニーズに対応した社会的基盤や社会サービスが準備されていない、だからだんだん地域社会は住みにくくなっています。開発時にこうなる要素はすでに内在していたわけですが、その変動に対応する必要を満たす活動が出てこざるを得ないわけです。

持続性という意味で位置づけられるのは南区大生学区の「NPOおたがいさまの家 二人三脚」です。2015年に生協総研の2050年研究会から『超高齢社会のコミュニティ構想』（岩波）が出されました。2050年にはすべての小学校区に「つどいの館」を設置し、そこに高齢者の居場所をつくりましょうというものです。この高齢者は65歳以上で、こういう人たちが集まって、居場所として、自分の生活を組み立てる基盤にするという構想です。こうした構想の大変なことは、超高齢社会とは家族という単位ではありませんからなくなっているということです。単身世帯は2020年には2000万世帯を超えて、全世帯の38%に達しました。こうした中で、家族に頼るというのは無理です。そこで、何が頼りになってくるのかというと地域社会の関係ではないでしょうか。

3) 方法

それから3つ目の協同の方法ということです。この方法というところで言いたかったのはコミュニケーションの取り方の問題です。一つはこのコミュニケーションが一方通行ではないものだということです。協同関係である限りお互いにとって不可欠な存在となっていくことを展望できるコミュニケーションができるいかなければと思います。相手のことを知るということを、時間をかけて継続していく、そのところがあるかないかで決定的に違ってくるだろうと思います。パーソナルな関係ができてきて、お互いに対する接し方の作法みたいなものができてこないといけないわけです。そういう時間をかけて、コミュニケーションを繰り返す中で、初めて人格的に出会うことができると思います。そういう会話ができるのはみなさんが創ってきた居場所なのだろうと思います。そこでは聞くということがたいへん重要だと思います。協同の関係では、自分と違うということに关心を持って、違うから聞きたい、話したい、そういう関係だと思います。



えざね協同ファーム 発足しました

あなたもぜひお仲間に！

報告：伊藤小友美（事務局）



HP

Facebook

昨年の第20回東海交流フォーラム（2024年2月24日開催）の第三分散会で、「市民がつくる農業（産消提携）」を語り合うをテーマに参加者で話し合いました。その時に報告をしていただいた中嶋芳夫さんを中心に、「えざね協同ファーム」が発足し、活動が始まっています。最新情報を報告します。

2024年5月からボランティアが農の体験を続けています。現在会員は約20名。それぞれが都合のよい日に、協同ファームを訪れて、できる作業を行っています。

2024年11月17日には、恵実（えざね）生産者グループ50周年感謝祭＆オープンファームに参加しました。恵実生産者グループは、みかわ市民生協の時代から50年のおつきあいです。豊橋市の最北部、清流豊川の流域で野菜・果物・お茶を栽培しています。食の安全と美味しさを第一に考え、環境を大切にした農業、次世代につなぐ農業に取り組んでい



ハウスの断捨離

ます。えざね協同ファームでは、その代表の安藤成彦さんにご指導いただき、野菜を育てています。グループに参加させていただき、感謝祭に向けて、断捨離も行いました。当日は柿の詰め放題が大人気で、笑顔がいっぱいでした。

12月14日（土）には、収穫祭を13名の会員とその家族で開催しました。お話を聞いたあと、畑で収穫体験をしまし



写真左は、長芋の土を盛った棚（5月）、掘るのは崖を崩すようにしました（11月・写真右）。

た。大根・長ねぎはひとりずつ堀り、サトイモ、長芋などは力に覚えのある人が掘ってくれました。その他に、さつま芋、大生姜、宮重大根、葉ネギ、水菜、小粒落花生などたくさんの野菜を持ち帰ることができました。

えざね協同ファーム



の発足についての確認を行い、持ち寄ったお料理を食べながら交流しました。畑のこと、おいしい野菜の食べ方や、身近な話題でいつも盛り上がります。2025年は月例の農収穫体験を行っています。5月18日（日）には、初めての総会を開催する予定です。ぜひ会員になってご参加ください。

最新の話題 代表の中嶋さんより 当ファームでは有機栽培を始めて丸5年になりますが3年目くらいから、微生物の働きでふかふかになってきました。化学肥料を使用すると土はだんだん硬くなっています（土の酸化）。高校の化学で学んだかな？ 窒素肥料は、硫酸・塩酸にアンモニアを反応させて硫安・塩安という肥料をつくります。土の中では微生物が、硫安から窒素を取り出し硝酸態窒素に変えて野菜は窒素成分を吸収します。土の中には硫酸成分が残り土が酸化し硬くなります。有機栽培をすると堆肥などの有機窒素が硝酸態窒素に変わり、残りの他の有機物を「エサ」にして微生物やミミズなどの生物が分解します。この土の中の微生物や生物の営みの過程で土の酸化を抑え抗酸化の状態に変わっていくので土がふかふかになっていきます。この状態の畑の中にいると気持ちがいいです。人間はストレスが溜まると活性酸素が増え酸化します。植物から抗酸化物質を摂取して酸化を抑えましょう。抗酸化の畑でリラックスを体感してみてください。有機栽培は、相対的に窒素成分が少なく、肥料の効きも遅いので、野菜はゆっくり健康的に育ち、美味しいが増します。

（いとう こゆみ）

公 示

特定非営利活動法人地域と協同の研究センター理事の補欠選挙に関する立候補受付について

第14期役員（任期2026年5月18日まで）のうち2名の理事から辞任申し出があり、第4回理事会にて辞任を承認しました。定款第16条に基づき第25回通常総会にて補欠選挙を実施します。選出される役員の任期は定款第18条2項に基づき、第14期役員と同日（2026年5月18日まで）とします。

役員選出規約第4条2項に基づき、役員立候補の受付を以下の通り公示します。

記**1. 補欠選挙の選出枠と定数**

理事：2名

選出枠：三重地域枠（1名）、全体枠（1名）

2. 立候補受付期間

2024年3月25日（火）～2024年4月4日（金）午後5時まで

3. 立候補の手続き

立候補は、地域と協同の研究センター事務局に電話又はメールで連絡し、立候補届出用紙を受け取り記入し、受付期限：4月4日（金）午後5時必着で、第25回通常総会役員選出管理委員（地域と協同の研究センター事務局室）に提出ください。

受付時間は土日（3月29日および3月30日）を除く午前10時～午後5時です。

事務局連絡先 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター

〒464-0824 名古屋市千種区稻舟通1-39

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315 E-mail AEL03416@nifty.com

4. 選出の方法

定款第16条及び役員選出規約第6条に基づき第25回通常総会に於いて選出します。

役員選出について（特定非営利活動法人地域と協同の研究センター役員選出規約）

補欠役員の選出枠について

地域枠＝三重の県域で設けます。三重県内に居住、又は職場がある等県域で活動する個人正会員・

団体正会員の選出枠です。正会員はお住まいの地域、職場があるまたは活動している地域で立候補することができます。

全体枠＝県域を越えた活動をする団体会員、研究センター運営に関わる理事、及び東海3県以外に在住する正会員の選出枠です。

以上

2025年3月25日

特定非営利活動法人地域と協同の研究センター

第25回通常総会役員選出管理委員

情報クリップ[®]

co-opnavi 2025.3 No.874

生協が取り組む被災者・被災地支援の今

日本生活協同組合連合会 2025年3月 A4判 32頁 363円（消費税込）

<私たちの「この一枚」> 大阪いざみ市民生協
創立50周年「コープフェスタ in 大泉緑地
2024」

機関運営部 広報・渉外グループ 藤井三良

特集

生協が取り組む被災者・被災地支援の今

<想いをかたちに コープ商品>

CO・OPコーヒーバックシリーズ

<生協大好きママコプ山さんの 教えて！CO・OP商品>

CO・OPふっくらにしんの甘辛煮

<最終回 地域・社会づくりREPORT>

平和の取り組み自主交流企画

<組合員に支持される店づくり・売場づくり>

ならコープ／コープきんき事業連合

<日本全国宅配現場におじゃまします>

コープあいち

<最終回 松丸 燐先生の食育エッセイ>進め栄養！

<明日のくらしささえあうCO・OP共済>

京都生協

<この人に聞きたい>

東日本大震災 若者の語り部 西城楓音さん

<ほっと navi>

コープながの／生活くまもと

生活協同組合研究 2025.3 VOL.590

現役世代の孤独・孤立の実態と今後の社会のゆくえ

公益財団法人 生協総合研究所 2025年3月 B5判 88頁 定価550円（消費税込）

巻頭言

二十一世紀の孤独・孤立

相馬直子

特集 現役世代の孤独・孤立の実態と今後の社会のゆくえ

孤独・孤立対策とは何か

宮本太郎

子育て世代の人づきあい：孤立から共生へ

荒牧草平

現役世代の人づきあい：

「人々のつながりの実態把握に関する調査」から 石田光規

ひとり社会の自由と孤独：増加する東京ミドル期

シングルの実態から

宮本みち子

孤独・孤立の問題に生協はどのように対応できるのか

前田昌宏

ソロ社会になる変化にあわせて：「一人でいても一人ではない世界へ」

荒川和久

■国際協同組合運動史（第36回）

1957年第20回ストックホルムICA大会② 鈴木 岳

■本誌特集を読んで（2025・1） 樽井美樹子・手塚智子

■新刊紹介

権藤恭之『100歳は世界をどう見ているのか』 山崎由希子

●公開研究会

生協総研賞・第21回助成論文報告会（3/14）

居住支援と空き家活用—住宅のかたちを考える（3/26）

日本の大学と奨学金問題を考える（4/22）

●生協総研賞第15回表彰事業 候補作品推薦のお願い

●生協総研賞第15回表彰事業実施要領（抄）

●2025年度「生協社会論」受講生募集

文化連情報 2025.3 No.564

協同の力を寄せ合い経営改善へ

日本文化厚生農業協同組合連合会 2025年3月 B5判 80頁 文化連情報編集部 03-3370-2529 *注

農協組合長インタビュー（102） つくば市農協
都市と農村の調和で営農を柱に強い農協を

関 喜幸

会員の声を聴き共有する活動<会員の声と対応>第18版より
協同の力を寄せ合い経営改善へ

栗山晴樹

院長インタビュー（355） 秋田厚生医療センター
住民と職員つなぐ教育の接着剤

外科医育成と救急に力尽くす

柴田 聰

医療安全管理者養成研修を開催します

厚生連全体で医療安全に取り組む文化の醸成を

文化連 医療安全管理者養成研修を受講して 熊谷雄一

2023年度文化連会員単協決算分析

総合事業を通じた組合員のくらしへの貢献

地域の持続的発展を 田中里奈

協同精神のリレー (24)

女性活躍のロールモデル

伊藤澄一

二木教授の医療時評 (229)

診療報酬引き下げによる医師の地域偏在是正は困難

50年間の診療報酬誘導策の検証 二木 立

2024年大統領選挙と**第2次トランプ政権の医療政策の展望**

震災復興と市町村との包括連携協定による

高山一夫

持続可能な地域づくり

古田雅俊

農高生と地域を作る

～私はいかにして農業高校教員となりしか～ (2)

大学時代の恩師 故・暉崎衆三先生との出会い

橋本 智

「医工連携」が拓く医療技術イノベーション (8)

オーストラリアでの生活 (オージーライフ) から

私が学んだものとは 梅津光生

にじ 2024年 秋冬号 No.690**協同組合における女性活躍**

一般社団法人日本協同組合連携機構 2024年 B5判 59頁 1100円(税込)

オピニオン

○協同組合はSDGsに「どのような」貢献をしているか?

小林 元 (日本協同組合連携機構 常務理事)

特集企画**協同組合における女性活躍**

○未来を切り拓き続けてきた協同組合の女性たち

青木美紗 (奈良女子大学 准教授)

○女性の想いが地域を変える

加藤久美子 (JA愛知東 女性部 やなマルシェ)

○JA南アルプス市女性部フレッシュミズ

設立にあたっての経過・活動報告について

瀧沢里美 (JA南アルプス市営農経済部生活指導課 次長)

○女性会と共に

佐々木弘子 (JAかみつが 総務部くらしの活動課 課長)

全国統一献立

富山県の郷土料理 ぶり大根

林 幸代

臨床倫理メディエーション (80)

幸福論: アランの哲学から学ぶ

苦しみを幸福に変える方法

中西淑美

デンマーク&世界の地域居住 (188)

ぐるんとピーの

「放課後デイサービス HEROs HOUSE

『ヒーローの家』(神奈川県藤沢市)

松岡洋子

□DVD紹介 Amazon配達員ー送料無料の裏で

□書籍紹介

知つてびっくり子どもの脳に有害な化学物質のお話

□書籍紹介 これ、本当に「食べ物」ですか?

▶線路は続く (194)

知られざる短絡線 伊勢鉄道 / 西出健史

▶最近見た映画 愛を耕す人 / 菅原育子

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(*)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお問い合わせください。

書籍紹介



神田 すみれ 会員からの書籍紹介

働くことの小さな革命 ルボ日本の「社会的連帯経済」

著者：工藤律子 出版社：集英社 出版日：2025年2月

価格：1,100円（税込） 発行形態：新書 ページ数：240ページ

著者 工藤律子さんからのコメント

ひとと競争するのではなく、協同で、自分らしく働き生きよう。そう言うと、多くの大人は「理想ばかり語っても、現実は」と、言い訳を始める。だが、その「現実」が不安に満ちている今、新たな理念を示し変えようとしないことほど、「非現実的」なことはない。

ここに登場する人々は、問題を抱えながらでも、未来に向かって自身や仲間、地域に、希望となる変化をもたらす。沢山の小さな革命が社会を変えてゆくということを、肌で感じてほしい。 北部レソンの棚田の町より

※フィリッピンからコメントをいただきました。

内容紹介

資本主義に代わる次世代の経済として、EUを中心に今、世界で推進される「社会的連帯経済」。

みんなが経営者となって働く労働者協同組合、NPO や社会的企業、地域通貨など利益追求を目的としない組織が連携し、新しい経済圏を形作る経済を指す。

そこにあるのは「競争ではなく自分らしく」「会社ではなくコミュニティのために」という働き方だ。

世界の格差・貧困問題を取り組み、事例を紹介。日本各地での取り組み・事例を紹介。

資本主義によって失われた人のつながりや小さなコモンを育む人々を描く、希望のルポルタージュ。

(出版社ホームページから)

【目次】

- 序章 未来を生きるための経済
- 第一章 自分を大切にする働き方
- 第二章 次世代の働き方「協同労働」
- 第三章 社会的連帯経済を支える金融
- 第四章 地域の「コモン」を育てる
- 第五章 市民が社会をつくる
- 第六章 コミュニティ(共同体)から始まる未来
- 終章 次世代エコノミーの当事者になる

研究センター4月活動の計画

- 8日（火）名城大学法学部「ボランティア入門①」
- 11日（金）中京大学「ボランティア①」
- 12日（土）第5回理事会
- 15日（火）名城大学法学部「ボランティア入門②」
- 18日（金）中京大学「ボランティア②」
- 21日（月）三河地域懇談会世話人会
- 22日（火）名城大学法学部「ボランティア入門③」
- 24日（木）あいち在宅懇世話人会
- 25日（金）中京大学「ボランティア③」
研究組織交流会（お茶の水）
- 26日（土）人口動態と組合員意識セミナー
- 29日（火）研究フォーラム地域福祉を支える市民協同
名城大学法学部「ボランティア入門④」

※企画は新型コロナウイルス感染拡大防止等のため中止・延期・オンライン参加のみとなることがあります。参加の前にホームページ等でご確認ください。

地域と協同の研究センター
Facebook
下記QRコードでご覧ください。
FacebookQRコード



地域と協同の研究センター
ホームページ
下記QRコードでご覧ください。
ホームページQRコード

